

内田康夫

Amber Road

アンバー・ロード

琥珀の道殺人事件



C★NOVELS

C★NOVELS

©1993年

アンバー・ロードさつじん じ けん
琥珀の道殺人事件

1993年 5 月21日 初版印刷

1993年 5 月31日 初版発行

著 者 ^{うちだ やすお}内田 康夫

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三 晃 印 刷
カバ ー 大熊整美堂
製 本 江利川紙工

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7
振替 東京2-34

Printed in Japan

ISBN4-12-500236-3

アンバー・ロード

琥珀の道殺人事件

内田康夫

挿画 福田隆義

目次

プロローグ

第一章 面影橋通り魔殺人

第二章 北山崎赤い壁

第三章 疑惑の海

第四章 軽井沢晩秋

第五章 自殺者は殺されない

第六章 つややかな記憶

エピローグ

あとがき

213 207 171 137 105 73 41 13 7

琥珀アンバー・ロードの道殺人事件

ホテルニューオータニのロビーには、約束より三十分も早く着いてしまった。彼は遅れて来ることとはあっても、時間前に着くことは絶対がない。それが分かっていたながら、滝子^{たきこ}はいつも早めに来てしまう。

ロビーはチェックインの客たちで混雑していた。エレベーターホール周辺は人通りがはげしく、落ち着かない気分だ。

ロビーのはずれの、大きな大理石の柱の脇^{わき}が待ち合わせの場所であった。そこは目印になりやすいせいか、滝子のほかにも人待ち顔が何人か立っていた。

目の前に二人の男が来て、時計を見ながら「まだか、遅いな」と遠くのほうを見渡している。何気なく二人の様子を見ていて、その大柄なほうの男に見覚えがあるような気が、滝子はした。

（どこかで会ったことがあるわ——）

もう一人のほうは知らない顔だ。はっきりそう断言できるのは、彼の右頬^{みぎほお}に大きなホクロがあるからである。

どこかで会ったような気がするものの、思い出せそうにない。出勤途中のどこかで、たまに出会う顔なのかもしれない。出会う顔なのかもしれない。

男のほうはしきりに背伸びをして、待ち人の現れるのを気にしている様子だったが、滝子の視線を感じたのか、チラッとこっちを見た。

一瞬、男は「?……」という表情になった。

滝子はそれに誘われるように、「あのオ……」と言った。

「あのオ、どこかでお会いしなかったでしょうか？」

「ん? いや……」

男は慌てたようにかぶりを振って、「人違いでしょう」と言い、それ以上の詮索^{せんさく}を拒否する鋭く険しい目で、滝子を睨みつけた。

「すみません」

滝子は肩をすぼめてお辞儀をすると、いたたまれなくなつて、逃げるようにその場を離れた。あの男が行ってしまったまで、しばらくは戻って来られそうにない。いずれにしても時間はまだ

たっぷりあるのだ。滝子はもういちど時計を確かめると、本館ロビーから新館へ通じる長い廊下を歩いて行つた。

絨毯^{じゅうたん}を敷き詰めた廊下の右側はゆったりしたラウンジで、外国人を交えた紳士淑女たちが賑^{にぎ}やかに談笑している。ラウンジの大きなグラスウォールのむこうは、滝の落ちるみごとな庭園である。そういうきらびやかな風景には、滝子は気後れ^{きおく}してしまう。東京に出てから、かれこれ四年にもなるのに、東京の、どことなくまやかしめいた雰囲気には、いまだになじめないものを感じるのだ。

廊下の左側にはいくつかの店が並ぶ。骨董品^{こつとうひん}や美術品を扱う店、陶器の店、ガラス製品の店、時計店、宝石店……どの店もおしなべて高価な品が多いけれど、店先のワゴンケースには「50%OFF」と赤札をつけた装身具なども出てい

る。

滝子は買うあてもなく、そぞろ歩きしながら
宝石店を覗いた。

「あら、琥珀……」

小さく呟いて、足を停めた。

ビロードを敷いた陳列ケースの中に、琥珀を
メインにした宝飾品が三十点ばかり、並べられ
ていた。指輪、イヤリング、ペンダント、ブロ
ーチ、ネックレス、ブレスレット……ずいぶん
いろいろな種類があるものだ。

（これ、久慈の琥珀かしら？——）

滝子は懐かしさに惹かれ、立ち竦むようにし
て、じっと見入った。

ゴールドやプラチナで縁取りして、美しく飾
り立てているものが多い。琥珀の深みのある透
明感ゴールドによく映え、値段以上の高級イ
メージがある。

「いかがでございますか？」

店の女性が寄ってきた。それを汐に滝子は店
先を離れた。店員にくっつかれるのが鬱陶しい
というより、買えもしないのに、物欲しそうに
眺めているさもしさを、見破られるのが恐ろし
かった。

店を離れながら、最後に陳列ケースを一瞥し
たとき、滝子は（あ——）と思った。

琥珀への懐かしい想いが、遠い記憶を呼び覚
ました。

（琥珀街道で会ったのだわ——）

滝子は間違いないと思った。八年前のことだ
し、少し顔つきは変わっているようにも思える
けれど、あのときの記念写真に写っている顔だ。
すぐ前に公衆電話があった。ほとんど無意識
に、受話器を握っていた。

滝子はこの出来事を、故郷の誰かにむしう

に伝えたかった。

東京で独り暮らしをしているけれど、私は一人なんかじゃないの——と、そのことを言いたくて言えずにいる、その代わりに、いまの出来事をどうしても言ってみたかった。

ベルが鳴って、片瀬真樹子かたせまきこの声が「もしもし」と言うのを聞いて、滝子は涙が出そうになった。

「元気？ 私よ、滝子よ」

「あら、滝ちゃん？ うっそー、しばらくだねえ、どうしてるん？……」

真樹子は陽気に喜んで、放っておくと際限なくお喋りしゃべがつづきそうだった。

「ねえ、真樹ちゃん、あんた憶えてない？ ほん、琥珀街道のときさ、小諸のお城の前で撮った写真、あったでしょう？」

「ああ、あったあった。たしか、アルバムさ貼

ってあるんでねかったかな」

「あんときの写真に、一緒に写っている人と、いまさっき会ったのよ」

「一緒に写っているって、誰？」

「ほら、久慈の人でない、知らない男の人が入っていたでしょう」

「ああ、そういえば、そんなような気もするけど」

「その人に会ったのよ、いま」

「どこで？」

「ホテルだよ」

「ホテル？……」

真樹子は戸惑った口調になった。滝子はドキッとして、慌てて言った。

「やんだ、真樹ちゃん、おかしい想像しねえでくれ。ホテルだったって、ホテルニューオータニだ。知り合いの結婚式で来て、そんでもって

……まあ、そんなことはどうでもいいけど、懐かしい人に会ったもんで、それで真樹ちゃんに教えてやんべえと思ってね」

「ふーん、そうなの、奇遇だなや……」

真樹子はそう言ったものの、滝子がはしゃぐほどには、滝子がその人物に会ったことへの関心は乏しかった。

(遠いものね——)

話をつづけながら、滝子は久慈と東京の距離を思い、八年という歳月の遠さを思った。久慈を出て、思うさま動き回っているはずの自分が、ほんとうは真樹子たちよりもずっと、過去のひとつところに留まっているような気がした。

「滝ちゃんも、こっちさ帰って来ればいいのになや」

結婚ばなしがあるのかないのか——といった話題には触れず、真樹子は最後にそう言って、

電話を切った。

長い廊下を通って本館ロビーに戻ると、思いがけなく、大理石の柱のところに彼の姿があった。

駆け寄ろうとして、滝子は立ち止まった。

さっきの二人の男が、軽く挨拶して、彼から離れるところだった。馴れた者同士——という印象なのに、三人とも不機嫌そうな顔だった。

ずいぶん間を置いて、滝子は近づいた。

「早かったんですね」

「なんだ、おまえこそ早すぎるじゃないか」

彼は気まずそうに視線を逸らして、歩きだした。滝子がいつもこうして早くから待っているのに、彼はそのことを知らない。

早く来すぎたことを、こんなふうに詰られるとは思ってもいなかったから、いまの男たちのことを、滝子は訊きそびれた。

彼の広い背中を見ながら、いそいそとついで行くと、ロビーの喧噪けんそうもきらびやかな紳士淑女のことも、滝子はもはや気にならなかった。ただ、そういう浮き立つ気持ちのどこかで、ふっと、何か不吉なことが起きるような予感がした。

第一章 面影橋通り魔殺人

1

このところ毎日のように、浅見光彦^{あさみみつひこ}のところに抗議の手紙が舞い込み、電話がかかる。

そのすべてが、「ホウトウのどこが気に入らないのか？」という趣旨のものだ。

ホウトウはもちろん、甲州名物の食べ物の中で、スイトンとウドンの中間といった感じの麺^{めん}とカボチャなどの野菜を味噌で煮込んだようなものだ。

浅見は甲府・身延^{みのぶ}方面を取材した際、何度かこのホウトウを食べたのだが、期待したほどに

は感心しなかった。その話を、軽井沢に住む内田^{うちだ}康夫^{やすお}という推理作家にしたところ、内田は断りもなしに小説に書いた。それも、ホウトウを食べた浅見が、こんな不味い^{まず}ものを——と怒り狂ったなどと、例によってオーバーに書いた。

電話や手紙はそれに対する抗議である。

「わが山梨県の誇る郷土料理にケチをつけるなんて許せない」という高圧的なものから、「あなたのお食べになったのは、ごくごく例外的にひどいものだったのでしょう」と理解を示すものまで、さまざまだが、そのつど浅見は、「じつはあれは作家の捏造^{ねつぞう}でして、まったく事実無

根のフィクションなのです」と弁解に努めなければならぬ。

もともと内田は、自分の私憤を勝手に浅見にかこつけて小説に書くという、少なからず狡い癖がある。以前、長崎に取材した際も、「長崎チャンポンなんて美味くない——と浅見は憤慨した」とやって、地元の人々の輦蹙をかった。

ホウトウにしろチャンポンにしろ、飽食の時代だからこそ、低級な料理だと思われがちだが、土地の人にとっては愛すべきふるさとの味なのである。それを貶すなどという心なさは、ロマンを追求すべき作家の風上にも置けない。お蔭で浅見は読者やファンから品性まで疑われ、大迷惑を被っている。

昨日など、ついに訪問者まであった。幸か不幸か浅見は留守だったので、お手伝いの須美子が応対した。

「この近所に住む者ですが、通りすがりにひと言、ご注意申し上げようかと……」

浅見本人ならともかく、須美子にしてみれば、電話の応対だけでいいかげんうんざりしているところへ、通りすがりの人間にまでチクリチクリやられたのでは、たまったものではない。

「光彦坊ちやまのお客さんは、おかしな方ばかりですね」

須美子は上目遣いに浅見を睨みながら、恨めしそうに言った。

「それもこれも、軽井沢のセンスのせいでしょう。あのセンスが見えると、ろくなことはありません。こんどいらしたら大奥様にひと言おっしゃっていただきます」

「まあまあ須美ちゃん、そうきついことを言わないでさ……」

浅見はひたすら低姿勢でいるしかない。だい

たい、浅見家では、次男坊の訪問客が歓迎されることはごく稀である。客は大抵、事件という厄介な土産を運んでくるからだ。

ことに軽井沢の作家などは、当家の次男坊を「名探偵」と煽て上げた張本人として、蛇蝎のごとく忌み嫌われている。当家の次男坊が事件に巻きこまれ、探偵ゴッコにうつつを抜かし、警察庁刑事局長である兄・陽一郎の宸襟を悩ますようになったのは、すべてあのヘッポコ作家のせいだと信じられている。

「あのお方とは、なるべくお付き合いしないようになさい」

母親の雪江は、内田が帰る後ろ姿を冷たい目で見送って、そのたまう。塩を撒かないだけ、めっけものかもしれない。

須美子ですら、浅見がいくら「内田さんとか、内田先生とか呼びなよ」と注意しても、「軽井

沢のセンス」と軽んじた呼び方をするのを改めない。ただでさえそうなのだから、今回のように問題がこじれてくると、浅見も弁護するどころか、迷惑を通り越して腹が立ってくる。「軽井沢のセンス」でもいいか——といたくもなる。

そういう折りも折り、浅見家を、戸塚警察署刑事課長の橋本警部が訪ねて来た。

平塚神社の銀杏がすっかり色づきはじめて十月なかばのことであった。

橋本は以前、高田馬場で起きた殺人事件の捜査で、浅見に世話になってからずっと、浅見の信奉者で、何か面倒な事件があると、相談を持ち掛けてくる。もっとも、浅見にしてみれば、警察官がいくら私服とはいえ、こんなふうに「白昼堂々」訪ねて来るのは困ったことである。浅見はもちろん、客の素性など、家族に言っ